

海と天をつなぐ風

コラム
秋道智彌 Tomoya AKIMICHI (総合地球環境学研究所)

太

平洋に拡散した人びとは、かつて風や海流をたくみに利用して海を越えた。その航海術を探る鍵が現代も残されている。ミクロネシアのカロリン諸島サタワル島でおこなった調査によると、人びとは風について強い関心を抱いており、全部で29の風が区別されている(図1)。しかも、季節ご

とに生起する風は現代の気象学が定義する熱帯低気圧によるものとは考えられていない。人びとのもつ風に関する知識の総体は「フリーヌ・ムウォール」(フリーヌは「星」、ムウォールは「嵐」の意味)と呼ばれる。

この知識によると、ある星が東方の水平線から出現する時期と、西方の水

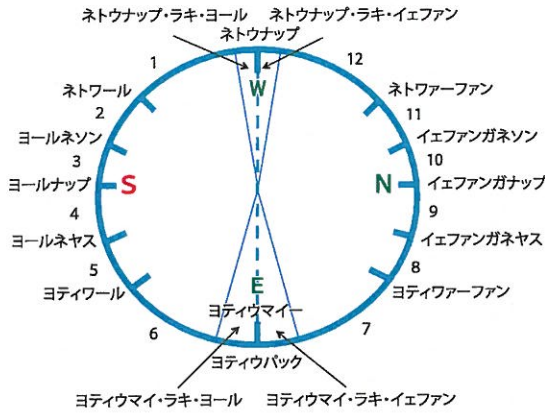


図1 サタワル島における風の方位名称

(出典：秋道智彌、1980「風の星」と自然認識——サタワル島における民族気象学的研究」『季刊人類学』11(4):3-51頁)

* 図中の番号が示す風の名称

1. ヤユノユン・ネトウナツ・メ・ネトワール/2. ヤユノユン・ヨールネソ・メ・ネトワール/3. ヤユノユン・ヨールナツ・メ・ヨールネソ/4. ヤユノユン・ヨールネヤス・メ・ヨールナツ/5. ヤユノユン・ヨティウマイ・メ・ヨールネヤス/6. ヤユノユン・ヨティウパツ・メ・ヨティウマール/7. ヤユノユン・ヨティウパツ・メ・ヨティワール/8. ヤユノユン・ヨティワール・メ・イエファンガネヤス/9. ヤユノユン・イエファンガナツ・メ・イエファンガネヤス/10. ヤユノユン・イエファンガナツ・メ・イエファンガネソ/11. ヤユノユン・イエファンガネソ・メ・ネトワール/12. ヤユノユン・ネトウナツ・メ・ネトワール

イエファンは「北」、ヨールは「南」、ヨティウは「東」、ネトウは「西」を表す。ネソは「下方」、ネヤスは「上方」、ラキは「少しだけ」、ヤユノユンは「間」を表す。ヨールナツ、イエファンガナツなどのナツは「大きい」ことを示す。また、ヨティウマイは「東よりの風」を示し、逆風で航海するさいのタツキング航法を指すヤンマイに由来する。

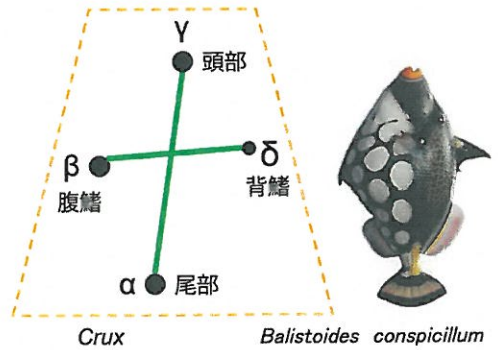


図2 南十字座とモンガラカワハギの相似性

平線下に没する時期に風が起る。南十字座の例を示そう。南十字座と海中にいる魚のモンガラカワハギはともにプープと呼ばれ、両者はたがいに形が似ている(図2)。そして、プープが海中から出現するさいと海中に没するさいに風が起る。出現時の風はイティガ・ヌツ(プープが指し示すの意味)と呼ばれる。いったん天空に移動したプープは別の時期の日没時にその尾を蹴って海中に没する。この時に発生する風はレベ・ヌツ(プープが蹴るの意味)と呼ばれる。

もう一例を挙げよう。サピーと呼ばれるひし形の星は、容器となる「木皿」をも指す(図3)。サピーはイルカ座に

ほかならない。海中から天空に昇ったサピーはある高さ到達すると、そのなかにあつた水がこぼれ落ちる。その水がこの時期に降る雨であると説明される。以上のほかにも、風の生起が特定の星の出没現象と関連づけられており、風が海と天の境界で発生するとされている。

現代の温暖化や気候変動による地球規模での風の変化により、島の人びとの伝統的な知識が形骸化されることになるのか。その実態は知る由もないが、風を海と天との境界における変化として考える発想が現代の気象学よりも古くから太平洋で知られていたことを忘れるべきではないだろう。

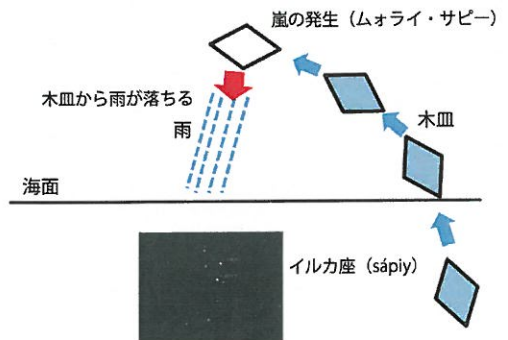


図3 イルカ座と木皿のメタファーと降雨の説明論